
残光

吉野圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

残光

【Nコード】

N48720

【作者名】

吉野圭

【あらすじ】

高校時代の彼女と久しぶりの再会。あの頃、僕たちは消え残る星のもとで約束を交わした。約束は今も守られているのだろうか。

五島プラネタリウムが閉まるからといって、僕を連れ出したのは彼女のほうだった。

それでも人が多すぎて入れないと分かると、

「ま、いつか。お茶でも飲んで帰ろう」

と回れ右をした。

駅ビル、1Fの喫茶店。

日差しが降り注ぐ窓際の席の、肩まで沈む深い椅子に寄りかかり、さつきから人波を眺めている。漆黒のテーブルの上を滑るように、いくつもの影が通り過ぎていく。グラスに浮かぶ氷は、春の光を吸い込んで、次第に小さくなっていった。

「失礼します。アイス・ラテのお客様」

テーブルの横で告げた店員に、由紀が小さく片手を上げた。

僕は無言でブレンドのカップを受け取る。

ありったけのシロップを、自分のグラスに注ぎ終えてから、小さなガラスの砂糖容器を彼女は取り上げて言った。

「砂糖、いくつだっけ」

「要らない」

「ブラック？」

「ああ」

そんなことも忘れたのか。

小さく息をついて、由紀の手元を見つめた。ガラス容器の中で、砂糖の細かい粒が、宝石のように輝いて揺れていた。

「あ」

カタン。

それは由紀の手を離れ、テーブルの上に白い粒を散らした。僕のジャケットの上にも、舞い上がった砂糖粒の一部が降り注いだ。

「ごめんなさい」

「いいよ」

慌てて駆けつけた店員から布巾を受け取り、僕がジャケットの砂糖を払っている間、由紀はテーブルをじっと眺めていた。

ふいに、くすつと笑う。

「どうした？」

覗き込むと、由紀はいたずらを思いついた子供のような目をして僕を見上げた。

「プラネタリウム、だね」

「え」

「ほら、ここ。星空みたいじゃない」

彼女が指差したテーブルの上には、派手に砂糖の粒が散らばっている。まるでゴミ屑をばらまいたような汚らしさで、美しい星空を連想するのは難しかった。

「このどっこが星空だよ？ ゴミ屑、まいたみたいだ」

僕の言葉に怒ると思った彼女は、顔を上げて笑った。

「あのとときも夏樹、同じこと言ったね」

「同じこと？」

「うん。忘れたの」

そう言って微笑む彼女の笑顔が、古い写真のように色褪せて見えた。

「なんだ、これ。きつたねえ！」
十年前の夏。

僕は静岡の御殿場にいた。

高校の陸上部の合宿だった。連日、激しいトレーニングでしごかれ、歩くのも辛いほど疲れきっていた僕らだけど、夜は眠れなかった。部の仲間と騒ぐのが楽しかったし、何より、降り注ぐような星空がまぶし過ぎたからだ。

そう、あの星空。

都会育ちの僕らにとって、御殿場の空は衝撃だった。

あまりに星が多すぎて、黒いドームの天井に、一面白い粉を散らしたようにしか見えない。だから僕は思わず、汚いという台詞を口にしたのだ。

「まるでゴミ屑、まいたみたいじゃん」

僕が叫ぶと、背中にくす、と笑い声がした。

「なによ、その言い方」

広瀬由紀の声だった。

ピンクのジャージの、白のラインが、原っぱを横切って近付いてくる。

異変に気付いて周囲を見回した。さっきまで近くにいたはずの仲間たちが、駆け足で原っぱを去って行く。闇の中でいくつもの歯が光って、“グッド・ラック！”のささやきが投げられた。

「あいつら……」

つぶやくと、ちょうど僕の目の前に立った広瀬は、「ん？」と首を傾げた。

「飯野くんたちに、中央広場に行けって言われたの。清水くんから話があるから、って。……それで。話って、何？」

僕は動揺して言葉を失った。

ちくしょう、あいつら、と何度も心の中で舌打ちしていた。きっとこれが連中なりの、バースデイ・プレゼントなんだろう。だけど、僕自身の、心の準備が整っているはずがない。一年以上も想ってきた子に、今日この場で、告白する準備なんて！

広瀬由紀は、白い肌に黒髪が映える綺麗な子だった。妙に大人っぽくて、同じ年なのに年上みたいに感じていた。僕が二学期の初め

という、ハンパな時期に陸上部に入部した理由は、マネージャーの彼女に惹かれていたからだ。……今では部の仲間のほとんどが、僕の恋を知っている。つまり僕をこんな窮地に追い込んだのは、連中の親切心。分かっていたけど、これは無茶なやり方だった。

心臓が大きな音を立てていた。

ポケットの中で握りしめている手の平が痛い。

いつまでも黙っている僕を見て、彼女はため息をついた。そして夜の空気を心地良さに吸い込み、夜空を見上げた。

「綺麗だね」

「え。……ああ、うん」

自分でも、ぎこちない返事だと思った。広瀬はとうとう笑い出した。

「嘘。さっき、“汚い”って言ってたじゃない。“ゴミ屑みたいだ”って」

「あれは、その、つい。あんまり星が多いから、びっくりしたんだ」
「でも“ゴミ屑”は、ひど過ぎるよ」

「そうかな？ そういえば小学校のとき、クラスに必ず一人、汚い奴がいてさ。黒い下敷きに……」

「ストップ！」

けらけら笑いながら、彼女は僕の背中を叩く。

「それ以上言わないで。分かるから。……うん、はっきり言って、私も最初ここに来たとき、そう思ったよ。あの下敷きみたいだ、って」

「だろ？ やっぱ、思うよなあ」

「思う、思う。だけど、“汚い”って思えるほど、たくさん星があっただってことが驚き」

「そうだな。これだけの星が、本当は地球から見えていたんだ」

「それを私たちは知らなかった」

「ああ。知らなかった」

「なんか、感動」

「感動……」

会話は星空に溶け込んだ。

僕と彼女は、圧倒的な星屑に押しつぶされそうな気持ちで、同じ空を見上げていた。

僕は告白のチャンスだということを、忘れた。忘れることにした。今ここで、たった二人で居ることが嬉しく思えたから。少しでも、余分な何かを求めたら、この瞬間が失われてしまう。そんな気がしていた。

「ねえ」

「ん」

「もうすぐ朝だよ」

黒い森の上の空が、青に変わっている。

東の空に大きな星が一つ、最後の光を放って輝いていた。

「朝、だね」

8・14。

僕はこの日、十七になった。

「誕生日おめでとう」

小声の祝福に驚いた。

「知ってたのか」

「うん。夏に生まれたから夏樹、でしょ」

恥ずかしいような、嬉しいような、複雑な気持ち。どんな顔をすればいいか見当もつかなくて、彼女に背中を向けた。

「なんで、知ってたんだよ」

「知ってるよ。好きな人のことだもん」

振り向いた僕に彼女は真剣な瞳を向けた。

「清水くんが入部してきたときから、好きだったよ。ずっと見てたのに、気付かなかった？」

砂糖を拭き終えたテーブルに肘をついて、由紀は窓の外を見ている。

白い頬に、いくつもの影が映っては消える。茶に染められた髪が、光に透けて金に見えた。

僕はそつと椅子を引き、腰を降ろして、そんな彼女を眺めた。変わったな、と思い、いや変わってない、と思う。そして僕はどうかろう、と考えた。あれから十年経ち、お互い大人になったような気持ちで、表面的には変わった振りを装っている。けれどいったい、僕らのどこが大人になったというのか。仕事の技術や、社会の常識を身に付けただけで、きつと中身はまったく成長していないのだ。

「仕事のほうは、どう」

カップを口に運びながら、僕は訊ねた。

「ん。順調だよ。相変わらず雑用係だけど、検定一級に通ったから給料上がったし、まだ当分はやめないと思う。それで、最近は何…」

秘書の仕事を、細かく説明する彼女に、軽く相槌を打ち続けた。

ほとんど内容が理解されないまま、言葉はBGMのように耳を通り抜けていく。

別に、本当に仕事のことを聞きたくて質問したわけじゃない。ただ、昔の友だちに会うと、「仕事はどう」と聞くのが常になっている。 “元気にやっている”、それだけ確認したいから。

「で、嫌な上司とかいないの」

「ぜんぜん。みんないい人だよ」

「そう。良かった。でも変なオヤジが近付いてきたら、いつでも言えよ」

「大丈夫だって。夏樹こそ、仕事は順調なの」

「まあな。とりあえず、まだシエーカー振ってる」

「関内です？」

「そ。あの店で」

「うわ、まだ、あそこに居るんだあ。なつかしいな」

「来ればいいのに」

「夜は時間が取れなくて、なかなか」

「ああ、そっか。そうだよな」

「ゴメン」

「いいよ、別に。……謝らなくていい」

沈黙が二人の空間に落ちた。

「気詰まりをやり過ぎすため、僕は煙草に火をつけた。」

また窓の外に視線を向けてしまった彼女の横顔を、無言で見つめる。

“ 幸せになる、って約束したじゃないか ”

喉まで昇った言葉を、煙に溶かし、吐き出して。

僕も彼女と同じように、人波へ視線を向けた。ちょうど制服のまま腕を組んだ高校生カップルが、笑い合いながら通り過ぎて行くところだった。

あのころ、僕らの付き合いもあんなもの　ママゴトだったのか
もしれない。

とりあえず映画に行き、食事をし。

一度だけ彼女を抱いたけれど、それはただ、子供同士のたわむれ
だった。

卒業と同時に、僕らは終わった。

バイトに明け暮れる僕と、学生の彼女とでは、会う時間も釣り合
いも取れなくなっていったのだ。

別れようと決めたあと、最後に二人で行ったのが、五島プラネタ
リウムだった。もう一度、あの“ゴミ屑”のような星空が見たくて
行ったのだが、プラネタリウムの空は記憶にあるものとあまりに違
い過ぎた。スクリーンに映し出された星は美しいだけで、静岡の空
の、星全体が押し掛かってくるような迫力がない。

それでも彼女は照明がとる直前、消え残った一つの星を指して、
「覚えていようね、あの星」

と言った。

それから、僕らは約束して別れた。

“あの朝、東の空に輝いていた星を、絶対に忘れないこと。いつまでも、友だちでいること。そしてお互い、幸せになること。”

二つの約束は、今のところ守られている。でも最後の約束は、…僕には分からない。彼女が守っているかどうか。

「由紀。幸せか」

心の中に留まらせるつもりが、煙と一緒に外へ出た。

それは独り言みたいに小さな声だったが、彼女は人波から僕へ視線を戻して、にこつと笑った。

「幸せだよ」

灰皿に煙草を押し付け、さらに問う。

「妻のある男と付き合っけていても？」

瞬間、彼女はテーブルに視線を落とした。それでも口許が笑っている。

「幸せ、だよ」

嘘ではないと感じた。

僕は頷き、「よし」と微笑んだ。

「幸せなら、いい」

偉そうな言い方が気に障ったのかもしれない。由紀はちょっと不満げに僕をにらみ、責めるように言う。

「夏樹こそ、幸せなの」

「僕？ 僕は充分、幸せだよ」

「嘘」

「嘘じゃない」

「彼女もいなくせに」

「それと幸せとは別」

「ふうん。なら、いいけど。でもさ、なんで彼女つくらないの？」

早く彼女つくってもらわないと、心配だよ。それに、いつまでも独り暮らしなんて、つまらないでしょ」

「うちの母親みたいなこと言うなよな」

苦笑して、カップの底に残ったコーヒーを飲み干した。彼女のグラスが空になっていているのを確認してから、伝票を持って立ち上がる。「そろそろ帰ろう。五時に、彼氏が来るんだろ」

「ん……」

レジに向かつて歩き出そうとしたとき、シャツの裾が何かに引っ掛かった気がして、振り向いた。

「もう少し、一緒にいて」

由紀がシャツの裾をつかんでいた。肩を震わせながら。

「馬鹿。帰れよ」

ぼん、と頭をたたくと、彼女は夢から覚めたようにまばたきした。「幸せなんだろ？」

笑いながら目配せしてやる。由紀も笑顔になって、うん、と頷いた。黒い瞳に浮かんだ涙は、すぐ乾いた。

外に出ると暖かい風が頬を撫でた。

陽は傾いて、ビルの隙間から弱い光を投げている。

「今日は付き合ってくれてありがとう」

JRを使う由紀は、地下鉄の階段を降りる僕を見送りながら言った。うん、と頷いた僕に、彼女は少しためらってから聞いてきた。

「ねえ。今は、幸せだけど。……もし、息切れしたら、夏樹のところに帰っていい？」

一瞬、言葉を失い。

いいかげん怒るべきかな。そう思いながら、笑った。

「ああ。いいよ」

後ろ手で“バイバイ”と振って、階段を一気に駆け下りる。

振り向いて見上げた空に、彼女の白いコートの裾がひるがえった。

著者 吉野圭 『rainy days』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4872o/>

残光

2010年10月30日14時25分発行